

活動報告

寺尾台団地でのゼミを主体とした地域活動の成果と課題

—多摩区地域課題解決事業の報告—

黒岩 亮子

Achievements and Issues of the community Activities in TERAODAI housing complex

Ryoko Kuroiwa

1. 事業開始の経緯

本事業のそもそもの契機は、多摩区から各大学への委託事業として実施している3大学連携事業への募集に応じたというものであった。2012年度の3大学連携事業について、川崎市多摩区役所ではその目的を、「区内に立地する3大学（専修・明治・日本女子）の知的資源及び人材を活用し、大学と地域社会が連携して実践的な活動を展開することで、地域社会の様々な課題の解決を図るとともに、文教都市としてふさわしい地域社会づくりを目指すこと」としている。また事業内容としては、「3大学が各々の事業テーマを設定し、多摩区から各大学への委託事業として実施します。地域の課題を掘り起こし、その解決に向けて、大学（教員・学生）と地域（住民・市民団体等）と行政の連携により、課題解決のモデルとなる実践的な取組を行います。対象事業は、地域課題として捉えられるものであれば限定しません」としている。留意点としては、①課題解決のモデルとなりうる実践的な事業であること（多摩区内のフィールドワーク中心のものが望ましい）、②学生をはじめ、広く区民や地域団体の参加が見込める事業であること、③広く成果を発表するための報告会やワークショップ等の開催を見込めるもの、④各大学の特性を活かした事業であること、となっている。2012年度・2013年度は、3大学共通の大テーマ「地域社会と大学が取り組むコ

ミュニティ交流の促進」が設定された。なお、2013年度には、この事業の名称は地域課題解決事業と変更されている。

以上のような募集に対して、地域福祉を学ぶゼミとして、大学周辺地域をフィールドとして何らかの研究・実践的な活動ができないかを模索することとなった。2012年度は日本女子大学におけるゼミのスタートであったが、ゼミのキーワードとして「地域関係の希薄化」「孤独死」「団地問題」などを挙げていた。また、同時期に多摩区内を中心に「地域の居場所づくり」を目的に多様な活動を展開しているNPO法人ぐらす・かわさきから「日本女子大学が隣接する寺尾台団地における空き家を学生がシェア居住することは出来ないか?」という提案を受けた。ぐらす・かわさきでは、「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるために、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」と定義されるエリアマネジメントの視点から、高齢化などに伴う団地地域での空き家の増加という地域課題に対して、何らかのアクションを起こそうとしていたのである。たとえば多摩区内の別の地域でも大学や商店街などとコラボレーションした試み（たとえば多摩区三田地域における明治大学と協働した「たま・みた・まちもり」活動など）も展開していた。結局、空き家を学生がシェア居住するという試みは現時点では実行することはできなかったが、寺尾台団地をフィー

ルドとした活動の可能性が浮かび上がってきた。

ここで寺尾台団地についての説明をしたい。寺尾台団地は川崎市多摩区寺尾台2丁目にある1970年7月に旧日本住宅公団により開発・分譲された全20棟412戸の団地である。一部屋の間取りはほぼ同じで広さは約53㎡である。なお、すべての棟が5階建てで、エレベーターはない。小田急線の生田駅から徒歩15分、読売ランド前駅から徒歩18分、さらに京王線・JRの稲田堤駅からも徒歩27分の高台の地にあり、日本女子大学からは10分ほどの場所にある。412戸という規模は当時の団地としては小規模であった。ちなみに東洋一のマンモス団地と言われた千葉県松戸市常盤平団地は1960年開発で5369戸、ぐらす・かわさきも活動している川崎市多摩区三田地域にある西三田団地は1966年開発で1108戸という規模である。これまで、寺尾台団地と日本女子大学の直接的な関係はほとんどなかったが、読売ランド前駅から団地までの徒歩での道のりが学生の通学路と重なること、大学前の掲示板を見る機会もあること等から住民の日本女子大学の認知度は高い。また、西生田生涯学習センターの講座に参加している住民もいる。なお、日本女子大学附属高等学校が「読売ランド前プロジェクト」に関わっており、読売ランド前駅でのコンサートに音楽のクラブに属す生徒が参加したり、美術クラブの生徒が駅前商店街を盛り上げるためにフラッグをつくったりなどの活動はしている。一方で、隣接するといっても「別の山」にある寺尾台団地に行ったことすらない大学関係者・学生がほとんどであり、そこでの地域課題が何であるかも全く分からない状況であった。そのため、一年目である2012年度では、地域課題そのものを明らかにすることを目的として、二年目には具体的な課題解決のための活動を行うことを目的として本事業を二年計画でスタートさせた。

写真 1 寺尾台団地



図表 1 居室の一例



2. テーマの設定—高齢者への生活支援～ 住・食・交～

ゼミのキーワードで挙げた「団地問題」は、高度経済成長期に開発された大規模団地での建物の老朽化や空き家の増加、高齢化の進展などの複合した問題のことである。一斉入居で大量の住民が入居した団地では、物理的な狭さもあり成人した子どもたちが団地を出て行ったりするなかで高齢化が一斉に進展し、孤独死の多発化などの今日の社会における課題が顕著に現れてもいる。なお、空き家の増加に対して、生活保護受給者や低所得者用の住宅に転用する団地も見られるが、新規入居者が孤立化してしまうことも多い。このような「団地問題」が寺尾台団地にもあてはまるのか、

それを明らかにすることが一年目の目的である。前述したぐらす・かわさきとの話し合いなどからは、寺尾台団地でも高齢化が進展し、空き家が増加していることが推測された。そこで、本事業のテーマを「寺尾台団地における高齢者への生活支援～住・食・交～」と設定し、高齢者にとって深刻な課題だと推測された①エレベーターのない住居（住）、②買い物へのアクセス（食）、③閉じこもりがちな生活（交）の実態とそれを解決するための方法を探ることとした。

そもそも、高度経済成長期に都心部のベッドタウンとして開発された大規模団地は、規模の大きさゆえに中心市街地から離れた高台などに建設されることが多かった。それでも当時、室内に設置された風呂やダイニングキッチンなどモダンな様式の団地に住む人たちは、羨望の眼差しを持って「団地族」と呼ばれ、その人気ゆえに入居の倍率は非常に高かった。そのため、入居基準には最低の収入基準を設けるなどの措置も取られていたほどである。「団地族」に憧れる人たちは若いファミリー層が多く、団地には子どもたちも多かった。しかし、団地には最低限のインフラしか整備されておらず、入居した住民たちがスーパーや保育園、学童保育の設置を要求する運動も見られた。このような生活を改善するための運動を通して、住民のつながりが構築されていったという経緯を持つ団地も多い。しかし、前述したように団地住居は一戸建て住居と異なり増築が出来ない為、子どもが成長すると家は狭くなってしまふ。もちろん子どもが家族との同居も出来ない。そのため、子どもの成長に伴い家族で住み替えをしたり、成人した子どもたちが出ていったりしてしまい、空き家の増加や高齢化が進展するという状況が生まれてしまっている。それに伴い、当初見られたような住民のつながりも希薄化しているのが現実である。また、寺尾台団地のような5階建てまでの団地に

エレベーターが設置されていないところがほとんどのため、高層階に住む高齢者が外出することが困難になるといったことも多い。前述したぐらす・かわさきの提案は、高層階に住む高齢者を低層階に住み替えさせ、空き家となった高層階に若者に居住してもらうことで、空き家対策と同時に若者も交えた新たなつながりの構築を目指したのもでもあったと言える。

本事業では、このような問題意識から高齢者の住・食・交の実態を明らかにすると同時に、団地全体においてどのような住民のつながり＝地域関係が構築されているのかを把握することも目指すこととなった。

3. 1年目の活動～課題発見のためのアンケート調査の実施へ

ゼミでは、前期には文献講読を通して「無縁社会」の実態や地域課題について学んでいった。また、後期には最近注目されている「コミュニティデザイン」という手法から地域課題を解決することの可能性についても考えた。コミュニティデザインとは人のつながりをデザインすることであり、地域に住む人たちが、その地域課題を自らの力で乗り越えることを目標とする試みである。コミュニティデザインのための思考を身につけるためには、①共感する技術（i デスクリサーチ、ii フィールドリサーチ、iii ヒューマンリサーチ）、②発見する技術、③拡散する技術、④統合する技術、⑤表現する技術が必要であると学んだゼミ生たちは、これらの技術を通して、寺尾台団地の課題を発見することとした。

まず、共感する技術である。これは「他人事を自分事にする事」が目的であり、第一段階であるデスクリサーチは2012年10月29日のゼミにおいて行われた。それぞれが当日までに、寺尾台団地の成り立ち、日本住宅公団について、団地一般が抱

えている課題について（高齢化率、空き家率、地域活動等）を調べ発表した。それをもとに、第二段階であるフィールドリサーチを2012年11月5日に実施した。大学正門横の坂道を登り、一戸建ての住宅地域である寺尾台一丁目を通り、寺尾台二丁目にある寺尾台団地に向かった。途中、寺尾台コミュニティセンターや、存続危機にあるというCOOPの見学も行い、周辺環境の理解に務めた。「寺尾台住宅管理組合」（以下管理組合と省略）事務所に立ち寄り、当時の管理組合理事長の案内により、団地の見学を行った。2012年10月末で大規模修繕が終了すること、それに先駆けアンケートを行ったが回収率は半分くらいだったこと、要望としてはエレベーター設置が多かったが今回は見送られ

たこと、団地内が暗いということで街灯の設置をしたこと、老朽化に伴って窓枠等を変えたこと、団地は緑豊かな環境でありシンボルでもある「まほろばの杜」と呼ばれる竹林があること、現在は駐輪場、駐車場の問題があることなどを聞くことが出来た。

第三段階であるヒューマンリサーチも、こうしてフィールドリサーチを通して行われたといえる。また、それに先立ち2012年10月12日には、ぐらす・かわさきから紹介していただいたAさん（子育てを終了して一人で暮らす女性）から、団地の現状を伺うことが出来た。そこから明らかになった点は以下である。

図表 2 寺尾台団地の現状

団地組織について

- ・自治会ではなく、寺尾台住宅管理組合の理事会がある
- ・理事会が1年任期の「階段委員」（防災委員を兼ねる）選出を行う。階段委員は10戸を担当する（一つの階につき2戸×5階=10戸）
- ・駐輪場委員がいる

団地の地域活動について

- ・草むしり等の清掃活動が年2回ほどある
- ・防災訓練がある
- ・以前は夏祭りが八角堂公園（寺尾台団地内にある公園で八角堂という歴史的建造物の跡地となっている）で開催され、盆踊りなども行われていた
- ・階段ごとに新年会、忘年会、送別会なども行っていたこともある
- ・階段の前の花壇の整備を行っているところもある
- ・子ども会があるようだ（自分には活動内容等は分からない）
- ・集会所を利用した自主保育「たんぼぼ園」（毎週火曜日、3・4歳児）がある
- ・集会所を利用した高齢者のための会「自由の会」がスタートした（民生委員の方が中心に始めたことを掲示板で知った）
- ・公園を利用した「多摩区みんなの公園体操」が週に2回ある

写真 2 寺尾台団地へのアプローチ



写真 3 寺尾台団地入口



これらを通して地域課題を個人がそれぞれに発見するのだが、そのヒントとして自身が見たこと、聞いたことに対する違和感を言語化するのが発見する技術である。そしてそれぞれが発見した地域課題やそれを解決するアイデアを出し合い（拡散する技術）、それらを統合しアイデアを形にしていく（統合する技術）ために、2012年11月12日と19日、二回に分けてワークショップを開催した。ワークショップでは、KJ法を使い、全員で課題についての整理を行った。そのうえで、その課題を整理するために何が出来るかの話し合いを行った。以上の作業から浮かびあがったのが、「買い物の困難」である。すなわち、駅から遠い、バスの便が少ない、坂が多い、エレベーターがな

い、といったこと、そして徒歩5分程度で行けるCOOPが存続危機になることから、とくに高齢者や小さな子どもを抱えた人に対して、買い物支援が必要なのではないかということであった。

しかし、これらは一部の住民やヨソモノである私たちが考えている課題に過ぎないのかもしれない。そこで、住民自身が考えている課題を知るためには、全員にアンケート調査を実施することが必要であるという結論に至った。そこで、「買い物支援」への意見に加えて、地域における交流や活動の実態を主な質問項目としたアンケート調査を行うこととした。このように可視化し実際にやってみるという作業が表現する技術である。

写真4 ワークショップ①



写真5 ワークショップ②



4. アンケート調査の内容と結果

アンケート調査を実施するにあたっては、他地域との比較も重要であるとして、多摩区内の西三田団地が実施した『孤立しないで安心して生活するための調査』（三田地域調査研究会）を参考とした。タイトルは、『寺尾台団地における住民の生活課題及びニーズ把握のためのアンケート調査』とした。調査票はA4判9枚で作成し、内容については、外出について（問1～問3）、交流について（問4～問10）、寺尾台団地の居住について（問11～問15）、地域活動について（問16～問19）、催し・イベントについて（問20～問23）、買い物について（問24～問32）、学生が地域に関わることへの意見（問33・34）、ご自身について（問35～問37）、とした。

対象は寺尾台団地全世帯（412世帯）としたが、あらかじめ管理組合理事会の協力により、空き家や調査不可世帯を教えてもらい、それらを除いた366世帯を対象とした。期間は2012年12月7日～12月27日、方法は学生によるポスティング（留め置き）で、郵送による回収を行った。回収数は143票で、回収率は38.8%（期日を過ぎて返

送された2票を除く)であった。この回収率は半数にも満たず高いとはとても言えないが、管理組合理事会が実施したアンケート調査の回収率が50%程度であったことを考えると、妥当な率とも言えるかもしれない。なお、回収票については、学生が2回クリーニングを行った上で、調査会社(コモン計画研究所)に入力・集計を依頼した。

アンケート調査結果の詳細については、報告書を参考とされたい。ここでは、今後の活動の方向に関わると考えられた点について記述する。

1) 回答者の性別

男性25%、女性が74%(1%は回答なしで不明)と女性が圧倒的に多かった。

2) 回答者の平均年齢

平均年齢64.5歳、最年少は30歳、最高齢93歳であった。高齢化が進んだとはいえ、寺尾台団地には最近、子育て世帯が多く流入してきたとも言う。しかし、こうしたアンケートに回答してくれるのは、少し時間の出来た年配の方、と言えるだろう。

3) 回答者の家族形態と同居人数

一人暮らしが29.4%、家族と一緒が69.3%であった(1.7%は回答なしで不明)。これを同居人数で見ると、2人42.7%、3人12.6%、4人10.5%、5人2.8%、6人0.7%となっており、配偶者との二人暮らしが多いことが推測される。

4) 回答者の住宅の形態と居住年数

持ち家が86%、居住年数の平均は25年と、持ち家で団地に長く居住している人が回答者には多かった。

5) 外出頻度

ほぼ毎日外出しているが62.9%、週に半分くらい外出しているが25.2%で88.1%の人は外出している。週に1回程度しか外出しない人は7.7%であった。

6) 主な外出手段(複数回答)

電車の利用率が最も高く77.6%、続いてバスが64.3%となっている。寺尾台団地のすぐ前から読売ランド前行きのバスが1時間に2~3本出ている。バスに乗れば駅までは5分もかからない。自家用車を利用している割合は26.6%とそれほど多くない。

7) 近所との関わり(複数回答)

挨拶程度が87.4%と最も多く、半数近くの人が立ち話や情報交換はしていると回答している。一方で、ほとんど付き合いがない人は10.5%であった。その理由として「よく知らない」「家にいる時間がほとんどない」、また3名は「苦手」と回答していた。

8) 近所の人との認知と顔と名前が一致している団地内の人

53.8%がだいたい知っているという回答しており、良く知っている6.3%を合わせて約6割の人は近所の人をだいたい認知していると言える。一方で、全く知らないという人は3名(2.1%)であった。また顔と名前が一致している団地内の人については、平均19.01人、最大で85人、最小で0人であった。

9) 交流が盛んになった方が良いか

約7割は盛んになった方が良いと考えているが、21.0%は積極的な回答ではなかった。また、交流の範囲では、団地全体が43.6%と最も高く続いて階段ごと36.6%となっている。

10) 孤立していると感じる人の有無

「あなたの近所で孤立していると感じる方がいますか」という質問については、「たくさんいる」3.5%、「何人かはいる」40.6%と約4割の人は身近にそのような人がいると答え、具体的には一人暮らしの高齢者を多くの人が挙げている。一方で、「ほとんどいない」という回答も16.1%で、この質問に対しては、「分からない」という回答も

36.4%と多く、近所とのつきあいの希薄さゆえの回答であることも推測される。

一方、主観的な孤独感については、「常に感じる」が2.8%、「時々感じる」が24.5%であった。

11) 寺尾台団地に居住した理由（複数回答）

住み始めた理由については「自然環境や住環境が良い」67.8%、「住宅の価格や家賃が適当」55.2%、「通勤や通学に便利」35.7%、「子育てに適していた」23.1%が多い回答であった。ちなみに寺尾台団地の賃貸の相場は7～8万、分譲価格も1000万円以下であることが多く、周辺とくらべて安いために人気となっているともいう。

12) 住宅の問題や不安（複数回答）

住宅の問題や不安については「エレベーターがない」45.5%、「建物や設備の老朽化」42.0%、「住宅が狭い・間取りが悪い」30.8%、「建物の耐久性」27.3%となっている。

13) 周辺の問題や不安（複数回答）

周辺環境の問題や不安については「坂が多い」62.2%、「駅までが遠く感じる」35.7%、「日常的な買い物の便」31.5%であった。坂の多さや駅までの距離の問題もあり、買い物に不便を感じている人がいることが推測される。

14) 地域活動について

まず、団地内にある公園の利用率は39.9%、団地内にある集会所の利用率は33.6%であった。地域活動については、「よく参加している」7.7%、「たまに参加している」32.2%で、その活動としては公園体操、防災訓練、清掃などが挙げられている。参加していない人は55.9%で地域活動はそれほど活発でないと言えるだろう。

一方で活動やボランティアへの参加意欲については、「少しなら関わってもよい」と考えている人は38.5%であり、「既に関わっている」「ぜひ関わりたい」と合わせて69.3%の人が何か活動はしたいとは思っていることが明らかになった。ただ

、「関心なく関わりたくない」人も20.3%いることも注目に値する。

15) 地域での催し・イベントについて

催し・イベントへの参加意欲については、「ぜひ参加したい」5.6%、「興味があれば参加したい」70.6%で、自分自身に適した活動であれば参加したいと考えている人が多いことが明らかになった。一方で、「あまり参加したくない」人は11.9%、「参加できない」人も9.1%存在する。

参加したい内容（複数回答）については、「季節の行事」27.3%、「バザー」27.3%、「コンサート」25.9%、「朝活（朝の時間のヨガや体操）」25.9%であった。

都合のよい日時（複数回答）については、平日が31.5%、土曜日の午後が27.3%であったが、平日のちょっとした時間に自身の興味のあるちょっとした活動をしたい人、土曜日の午後などに季節の行事などに参加したい人が多いのではないかと推測される。

16) 買い物について

生鮮品を買う店（複数回答）については、近くのCOOPが81.8%と圧倒的に多く、続いて読売ランド前駅隣の小田急OXが66.4%となっていた。COOPは日用品を買う店でもトップの74.1%であり、COOPの存在が大きいが明らかになった。そのためか、COOP存続危機の認知率は90.9%と非常に高かった。

買い物手段（複数回答）については、徒歩79.7%、バス42.0%、自家用車37.1%であった。買い物頻度は週に3～4回が48.8%、週に1～2回27.3%であった。

17) 「買い物支援システム」について

アンケートでは、「買い物支援システム」を「高齢や病気、子どもがいるなどの理由で買い物が困難な方に対して、買い物を代行したり、一緒に買い物に行き荷物を運ぶ」と定義し、この買い物

支援システムがあったら良いかを質問した。「あったら良い」が74.1%、「なくても良い」が7.0%と多くの人があるシステム自体については良いものであると評価した。

一方で買い物支援システムを利用したいかという問いでは、「利用したい」は23.1%、「利用したくない」は3.5%、「自分には必要ない」は45.5%であった。約2割の人は既に買い物の困難を感じ、支援が必要であると感じている。

また、買い物支援システムへのボランティアとしての参加意欲を質問したところ、「ぜひ参加したい」0.7%、「参加してもよい」9.1%、「少しなら関わってもよい」28.0%、「関心なく関わりたくない」13.3%、「関わることは難しい」40.6%であった。

「地域活動への参加意欲」では約7割の人が少し以上の関わりを良しとしていたが、買い物支援システムは、日常生活を支えるために責任を伴うもの、と考えた人が多かったのか参加のハードルは高かった。

5. アンケート結果を受けて

－調査結果の配布とコミュニティカフェ

アンケート結果を受けて、ゼミでは今後の地域活動についての話し合いを行った。まずは、この結果を住民に伝えることで意識を高めてもらうため、調査票を配布した全世帯にアンケート結果報告をポスティングによって配布することとした(2013年2月28日)。また2013年3月16日の多摩区庁内市民館で行われる3大学連携事業シンポジウムにおいて調査結果を発表すること、学生がコミュニティカフェを実施し住民の方と交流したい、ということも伝えた。

2013年3月16日に実施したコミュニティカフェには、様々な人が多く集って下さった。このコミュニティカフェは、寺尾台団地においても地域関係の希薄化が進展していることが明らかにな

り、関係を取り結ぶきっかけとなるような催し・イベントの一つの案として、まずは市民館で多くの人を対象に行ってみようということで実施したものである。コミュニティカフェのヒントとしたのが、2013年1月27日にゼミで訪問した常盤平団地の「ふれあいサロン」である。千葉県松戸市にある常盤平団地は、孤独死対策を団地自治会・団地地区社会福祉協議会・民生委員の三者、すなわち住民自らで率先的に行っている大変有名な団地である。見学当日は、自治会長である中沢卓実氏による2時間の講演(研修会という名前でやっている)、その後に「ふれあいサロン」の見学を行った。このサロンは団地内アーケードの空き店舗を利用して、住民のボランティアにより実施さ

写真6 「ふれあいサロン」の様子



写真7 「ふれあいサロン」外観



れている。コーヒーや紅茶は入室料100円を払えば飲み放題で、食べ物の持ち込みも自由である。年末年始を除く360日実施しているのが大きな特徴である。見学当日も住民、それも年配の男性が楽しそうに集っていた。手作り感あふれるこの空間をヒントして、学生たちはおそろいのエプロンを作成、テーブルをクロスで飾り、お菓子は自由に取ってもらうよう工夫した。またテーブルの上には様々な資料を置くなどして、ちょっとした情報提供も試みた。

コミュニティカフェには、管理組合の次期理事長や役員も来て下さり、次年度の活動について話し合う機会となったことが大きな収穫であった。さらに、コミュニティカフェを実施して得たことは、学生たち、とくに福祉を学んでいる学生にとってはこうした活動が非常に向いている、という実感である。はじめは来場者もほとんどなく閑散としていたのだが、学生たちが庁舎内に出向いて積極的に呼び込みをしたところ、明るい声に誘われてあっと言う間にカフェテーブルがいっぱいになった。学生たちは笑顔でおしゃべりを楽しみ、時に相手の話をじっくりと聞き、長い時間席に座って下さった人もいた。コミュニティカフェを実施する前の学生たちにとって、住民との交流はたとえばアンケート結果でも見られたように、それを望んでいない人もいるということから、多少の不安があったようである。しかし、実際に住民の方と接してみると、とても楽しく時間が経過していき、「また行いたい」という思いが芽生えたようだ。とくにもともと人との関わりを好む学生が多かったり、社会福祉援助の授業や演習で対人関係を学んでいたりと、なによりも女子学生特有の明るくさわやかな感じが多くの人に喜ばれた、ということもあるだろう。この経験は、今後の活動ではこうしたちょっとした交流が担い手としての学生側にも、住民側にも重要であることを再確認する機会となった。

写真8 コミュニティカフェの様子



写真9 現4年の学生たち



6. 2年目の活動—多世代交流型イベントの実施へ

2年目では、昨年度実施したアンケート調査結果から明らかになった寺尾台団地における地域課題について、住民と協働してその課題解決ための提案、実際の活動などを行うことを目的とした。活動のメインとなる学生は新3年生へとバトンタッチをし、4月のゼミにおいて4年生が3年生にレクチャーする機会を持った。また、4年生もアンケート調査を深めるという目的で、アンケート調査回収時にインタビューに協力してくれる方を募ったうちの2名については、西生田生涯学習センターや自宅にお伺いして一緒にインタビューを

行った。その他の2名については教員が単独でインタビューを行った。インタビューに答えてくれたのはいずれも女性で、40代が1名、60代と70代が3名となっている。このうちの2名が入居開始当初に自主保育であるたんぼぼ園の活動などを立ち上げたりしていたのだが、そのたんぼぼ園で現在活動を行っているのが40代の女性であり、インタビュー時にこちらが話題を提供することで、今まで知らなかったお互いの情報（立ち上げ当初のこと、一方で現在のこと）を知ることが出来たようである。これは寺尾台団地内において活動の継承を意識的に行ってこなかったことを示しているともいえ非常に興味深かった。

2年目の特徴として挙げられるのは、コミュニティカフェを実施した際に訪れてくれた管理組合の理事会役員の方々との話し合いを重ねながら、効果的な地域活動を目指したことである。理事会役員は、地域関係を活性化したいという思いを持っており、団地内でのお花見会や点呼確認や防災食の試食も行う大規模な防災訓練を行うなど、今までとは違った活動を展開していたところであった。そして、たとえばお花見会には110名くらいの住民が参加してくれたように、このような活動に住民の関心があるのではないかとの手ごたえを持ち、地域関係を活性化するための何らかのきっかけを求めている。こうした住民側のニーズが私たちの活動の趣旨とマッチし、全面的に支援をしてくれることになった。寺尾台団地には入居開始当初から自治会がなく、管理組合が修繕維持などに関する活動をするのみで、地域関係の活性化などの課題には組織的には対応をしてこなかったという歴史がある。こうした地域は珍しいということであるが、住民が自発的に地域関係を築いてきたということでもある。入居開始当初から居住していた役員は、「『陸の孤島』と言われていたけれど、こじんまりとしてコミュニケーションが

密だったよね」と懐かしそうに語ってくれた。また、一番始めにお話しを伺ったAさんも団地における様々な活動がある程度は理解していたように、理事会役員もまた掲示板に貼られた様々な活動の情報や、お花見や防災訓練といったイベント時にどのような人が来たのかを確認するなどの作業を通して、とこところに住民のつながりを見ることは出来ていた。しかし、それら全体を包括的に把握することが出来ず、団地全体としての地域関係の活性化につながらないという課題に直面していたと言える。

そこで、アンケート調査結果から明らかになった地域課題のうち、とくに地域関係の活性化を目指した活動をするを理事会役員と共に模索することとなった。2年目の活動をまとめると以下のようなになる。

図表3 2年目の活動

- ・住民へのインタビュー（4名）
- ・寺尾台団地見学および寺尾台住宅管理組合理事会役員と学生の話し合い
（2013年6月21日、2013年7月5日および教員との打ち合わせ数回）
- ・寺尾台団地における活動の見学
子ども会（夏祭り等）2013年7月22日
自主保育たんぼぼ園 2013年9月10日
自由の会（高齢者サロン）2013年10月14日
多摩区みんなの公園体操 2013年10月11日
- ・先進事例の見学
港区＋慶應義塾大学「芝の家」「三田の家」
2013年9月5日
横浜市栄区UR公田町団地「NPO法人お互い様ネット」2013年9月17日
- ・多世代交流型イベントの実施
コミュニティカフェ 2013年10月16日
ハロウィンパレード・パーティー 2013年10月31日

住民へのヒアリングや理事会役員との話し合いからは、1. 高齢化の進む団地内での「無理のない範囲」での交流が求められていること、2. 安心安全な団地であり地の利が良いこと、適正な家賃等の理由から子育て世帯が増加していること、3. 小学生を対象とした子ども会活動が非常に活発になされていること、4. 一方で、世代を超えた交流はほとんど行われていないこと、5. 理事会では、防災訓練など関心の高いイベント等を通して多世代交流に向けた活動を始めていることなどが明らかになった。

とくにアンケート調査の回答者の属性が高齢者に偏ってしまっていたために見えなかった、子育て世帯の増加、小学生を対象とした子ども会活動が活発化していることが大きな発見であった。子ども会活動は、毎年子どもが自主的に行事を決めて行っており、団地内のほとんどの小学生が参加しているほど活発な活動であった。そこで、子ども会活動に参加しているBさんへのインタビューを経て、2013年7月22日に行われた夏祭りを理事会役員と共に見学させて頂くことになった。夏祭りでは、集会所内の倉庫に眠っていたというお神輿を子どもたちの手できれいに修復し、数年ぶりにそれを担いで団地内を練り歩くことも行われた。また、集会所では手作りの縁日も開催され、子ども用プールに水を張ってヨーヨー釣りをしたり、手作りの射撃があったりととても盛況であった。昼食は流しそうめん、参加していた30名ほどの子どもたちは大騒ぎであった。これらの活動には、それを準備する母親たちの存在も欠かせない。子ども会担当の委員は前期と後期に分けられて決められているが、前期の夏祭りは毎年最大の行事であり、これらの準備を通して自然と母親たち（時に父親）のつながりが強くなることが推測された。また、「先生」と子どもたちや親たちに慕われる年輩の男性の住民が、お囃子のテープ

をつくって一緒に団地内を回ってくれるなどのつながりも見られた。一方で、夏祭りが行われることは団地内の掲示板で周知されていたものの、子どもがいない世帯の人たちはその詳細をほとんど知ることがなかったようである。そうした中、お神輿が団地内を一周することで、部屋の窓越しにそれをほほえましく見つめる高齢者の姿も見られ、活動を「見える化」することの重要性や、参加には様々なレベルがあるのではないかとのヒントを得る機会ともなった。

写真10 お神輿の様子 写真11 夏祭りの屋台



子どもは地域活動に最も参加しやすい世代であろう。親たちも生活に身近なところで子どもたちを遊ばせることを望んでいる。お花見の参加者の1/3も子どもであったというように、子どもたちが楽しめる活動を行うことは地域関係の活性化の鍵になるように思われる。寺尾台団地には、もっと小さい子どもたちのための活動である自主保育たんぼぼ園が集会所を利用して行われている。たんぼぼ園の定員は20名で幼稚園入園前の子どもを対象としている。前述したように、この活動は入居開始当初のインフラが整備されていない時代に、団地住民たち、それも母親たちが声をあげてつくったもので、開設当初は団地住民の利用で満員であったらしい。しかし、現在では幼稚

園のプレ保育なども盛んになっている影響もあり、今年度は3,4歳児を対象に団地住民1名、団地以外の近隣住民6名の計7名で、毎日ではなく週1日の活動が行われている。たんぼぼ園では保育士の先生をお願いし、親も一緒に歌を歌ったり外遊びをしたりと様々な工夫されたプログラムがなされている。2013年9月10日に見学させて頂いた際には、団地内公園での外遊び中に、引越越しをして子どもを産んだばかりという母親が「この会ではどんなことをしているのですか。なかなか赤ちゃんもいると外にも出られなくて、これまでもこの会の活動が気になっていたんです」と声をかけてきた。お神輿もそうであったが、地域活動はそれを「見える化」することで、様々なレベルでの参加を促すことができるということの良い例であると言えよう。

このように子どもを対象とした活動がある一方で、高齢者を対象とした活動はこれまでなかなか実施されなかったという。このような中、熱心な民生委員の壮年が働きかけて高齢者対象のサロンとして2012年度から月1回のペースでスタートしたのが自由の会である。会場は集会所で、足の悪い方も来やすく、いつも参加している人が来ないと民生委員がすぐに確認に行くことも出来る。2013年10月14日に参加させて頂いた自由の会では、多摩区内の地域包括支援センターの職員2名が健康体操などのプログラムを実施していた。毎回、10数名の高齢者が参加するというが、圧倒的に女性が多く男性は2名ほどであった。「ここでは皆が自然と会話出来るように心がけている」という民生委員の言葉からは、特別な活動というよりも日常生活の延長となるような活動、そこから生まれる自然なつながりを目指していることが感じられた。

また、最も気軽に住民が参加できる活動としてあげられるのが、多摩区みんなの公園体操である。

この体操は多摩区が推奨しているもので、テープに吹き込んだ体操の音楽・号令に合わせて公園内に集まって30分ほど体操をするというシンプルなものである。団地内公園でも週2回、朝の9時から9時半まで体操が行われている。参加者の多くが元気な高齢の方であり、体操に参加させて頂いた2013年10月11日には15名ほどが集っていた。リーダーとなる女性がデッキを真ん中に置き気持ちよく体操をし、体操が終わった後は皆で手をつないで輪になって号令をかけ人数を確認していた。これにより、ゆるやかな安否確認が行われているのである。

こうした活動に参加してみて、改めて理事会役員の課題ともなっていた、様々な地域活動はあるがそれを包括的に把握する人や組織がないこと、そのためにこうした活動を地域全体で共有できていないこと、何よりも世代を超えたつながりが構築されていないこと、を実感することとなった。そこで、部外者＝ヨソモノである大学生（という人や組織）が、地域関係の活性化とともに様々な活動をつなぐきっかけをつくるために、多世代交流型イベントを実施してはどうだろうか、と考えるに至ったのである。

7. どうしたら多世代交流が行われるのか —ハロウィーンイベントに至る経緯

①ハロウィーンイベントの提案

当初、学生たちは多世代交流型イベントのアイデアとして、「子どもがおばあちゃんと共に昔ながらの料理を作って一緒に食べる」など食を通じた交流を考えていた。しかし、集会所には調理施設がないこと、少し離れたところにあるコミュニティセンターでは高齢者の参加が難しいことなどから別のアイデアを探ることになった。また、若い世代に魅力的な活動とは何かと理事会役員から問われ、様々な世代の人たちで階段前の花壇に花

を植えて育てる事や、学生と子どもたちが一緒になって団地内の案内板をつくと良いのではないかといった環境美化とも関わる活動や、子どもがつくった団地内のイスに散歩帰りの高齢者の方が座ってくれるのも交流の一つだ、など様々なアイデアも浮かんだ。さらに昨年度に実施したアンケート調査を見直す中で、住民が参加したいイベントとして「季節の行事」があることに注目し始めた。お祭り、餅つきなど様々な季節の行事がある中で、子どもが喜びそうで、かつ高齢者にも楽しんでもらえるもの、として挙げたのがハロウィーンである。

理事会役員との話し合いでハロウィーンを提案すると、年配の役員たちからは「それはどのようにやるのか」「よく分からない」といった反応も見られた。一方の学生たちは、子どもの頃からハロウィーンに慣れ親しんでおり、学生がアイデアを出す形で主体的にイベントを実行することになった。ある意味、理事会役員があまり分からないものとして興味・関心を持ってくれたことで、学生たちもやりがいを持ち、かつ自由に活動内容を考えることにつながったとも言えよう。

ハロウィーンがなぜ多世代交流型のイベントなのか。ハロウィーンと言えば、子どもたちが仮装をして家を周り「トリックオアトリート」と叫んでお菓子をもらう、という子ども対象のイベントと思われがちである。しかし、このようなスタイルが確立しているハロウィーンだからこそ、たとえば子どもたちが普段全く交流がなかったり、閉じこもりがちだったりする高齢者等の家を訪ねることに違和感はない。家に訪ねてきてくれるのであれば、たとえば集会所で行われる活動に参加しない人、できない人でも、ドアを開ける、お菓子をあげるといった形でイベントに参加できるのではないかと考えたのである。また、お菓子をあげなくても、子どもたちが仮装して団地内をパレー

ドするのを見るだけでも参加である、とお神輿の例を思い出しながら確認しあった。また、パレードの後に集会所でパーティーを開催することで、子どもたちもそれ以外の人たちも共に集まり、交流が出来るのではないかとアイデアも出て、パレード+パーティーのⅡ部構成からなるハロウィーンイベントを実施するに至ったのである。

しかし、アイデアを実際に形とするためには様々な課題が生じてきた。たとえば、始めはお菓子をあげる人たちの家にシールを貼って、子どもたちが訪ねる家をつかるようにとのアイデアが考えられていた。しかし、そのためには何名の子どもが参加するかを事前に把握し、子どもたちをグループ分けし訪ねる家をあらかじめ決める必要があること、それに伴いお菓子を準備してもらう必要があることが分かってきた。一方で、地域関係の活性化のためのイベントであるならば、一人でも多くの人に参加してもらいたい。そのためには「誰でも参加できます。当日参加OK」とすることで参加のハードルは下がり、事前に参加する人としらない人を区別してしまうのも良くないという意見もあった。そこで、第一回目ということで参加者数の予想がつかないこと、また家を訪ねるといふことの混乱を避けるためにも、今回は団地内にいくつかのスポットを設け、お菓子をあげる人たちはそこに自由に集まってもらうやり方に変更することとした。お菓子をあげる人たちもまた、このスポットに集まることを通じて交流することができないかと考えたのである。

このようなイベントの内容を周知するために、子ども会の方への情報提供、ポスターの掲示、ビラの配布などを行った。当日参加する子どもたちには自由に仮装すること、お菓子をもらうポットを持ってくることを求めると同時に、こちらでも仮装やポットを用意し準備をしていない子どもたちにも対応できるようにした。また、5つ設定し

たスポットには何時くらいに到着できるか、パレードを担当する学生が事前に道順と時間を確認するようにした。さらに、パーティーを担当する学生は、子どもも大人も楽しめるものとして、「この間はビンゴで盛り上がった」という情報を理事会役員からもらったこともあり、ビンゴと景品の準備、また会場の装飾や食事の準備を進めていった。

②コミュニティカフェの開催

実はこうした大掛かりなイベントを行うことには不安もあった。その一つが、ヨソモノの大学生が突然活動をするを受け止めてもらえるだろうか、という不安であった。もちろん前年度には全戸を対象としたアンケート調査を実施しその発表会・コミュニティカフェへのお誘いをしたり、理事会役員との話し合いを重ねてきた。また、学生が活動をしていることをさりげなくでも伝えるために、学生たちもたんぼほ園や体操に顔を出すなど最低限のステップは踏んできた。しかし、コミュニティカフェの経験からは、実際に学生と住民が顔を合わせ少しでも交流をすることが重要であることを学んでいた。そこで、ハロウィンイベントを実施する前に、集会所内でちょっとした交流を目的としたコミュニティカフェを開催しようということになった。これを担当するのは、「また行いたい」との思いを持っていた4年生である。イベントとのつながりを考え、コミュニティカフェではハロウィンにちなんだ工作（コースターづくり）プログラムを実施することとした。また、年配の方たちからたびたび「よく分からない」という声があったことを踏まえて、ハロウィンの起源を書いて貼ったり、仮装のイメージを知ってもらうために学生もちょっとした仮装をしたり、帽子やマントを身にまったりハロウィンシールを顔や手に貼って記念撮影をするコーナーを設けたりした。集会所内にはもちろ

んハロウィン装飾を施した。こうしたことから当初は「ハロウィンカフェ」という名称で実施しようかとも考えたが、日本女子大学の学生の地域活動を知ってもらうことが重要であることから「女子大カフェ」という名称をつけて、2013年10月16日の午後に集会所でコミュニティカフェを実施した。

コミュニティカフェには子ども30名、親10名、年配の女性10名、男性（理事会役員等）5名程度の参加があった。当日は朝に台風が上陸しており、開催自体も危ぶまれ実際に遠方の学生は参加することが出来なかった。一方で、小学校が休みになり、午後には天気が回復したこともあってか、多くの子どもたちが誘いあって参加してくれることとなった。工作も大盛況で、子どもたちは「ハロウィンパレードとパーティーにも来るね」と数日後に持たれるイベントを楽しみにしているようであった。また、子ども会の母親にも是非イベントにも参加してほしいことを伝えたり、年配の方々にはスポットでのお菓子の配布への協力を依頼することが出来た。

写真12 10月コミュニティカフェの様子



③ハロウィンイベントの実施

2013年10月31日、ハロウィン当日に行われたハロウィンイベントには、カフェを上回る

70名近くの参加があった。中には、団地内に住む祖父母に誘われてやってきたという団地以外に住む子どももいて、パレードの出发点となる団地内公園は夕方であるにも関わらずものすごい数の人で大賑わいであった。パレードを部屋の窓越しからでも見て欲しいと、パレードを先導する学生や子どもたちはランタンや灯りを持っていたが、「トリックオアトリート」の大合唱でパレードをしていることに気付いた住民もいたかもしれない。実は、ハロウィンイベントを実施するにあたっては、それを望まない住民の声にどのように配慮するかという課題もあった。当初はお神輿の時のようにハロウィンにちなんだ音楽をかけてパレードする予定であったが、静かな環境を保つためにもそれは控えることとした。それでも、多くの人がパレードに参加することになり、「トリックオアトリート」の声などを迷惑だと思った住民もいたことだろう。これは今後の活動の大きな課題である。

一方、5つのスポットには年配の女性など15名ほどの住民がお菓子の配付に協力してくれた。パレードに参加した人数が多く、各スポットに到着するまでに時間がかかってしまったが、各スポットには学生がランタンを持って立ち、パレードの到着を待つ間にはおしゃべりをしたりと交流の時となったようであった。パレードを先導する学生は、人数の多さやそれに伴う様々なハプニング（途中で子どもがトイレに行きたくなる、道に迷う等）に慌ててしまっていたが、それをフォローしてくれたのが子ども会のお母さんたちである。道案内や誘導を含めて自発的に協力をして下さり、これが住民の力なのだと学生も大いに教えられる経験でもあった。ゴールとなる集会所には、当初の予想（コミュニティカフェへの参加人数である50名ほど）を上回る人が集まることとなり、ちょっとした混乱状況であった。しかし、そこで

も理事会役員の誘導があり、自発的にお母さんたちや年配の方たちが集会所の外に出て下さったりして、なんとか集会所内でビンゴをすることが出来た。食事集会所の窓を誰かが開け放ってくれて、外にいた人たちも楽しむことができたようだ。ここでも、住民だからこそできる臨機応変な対応に、学生たちは大いに助けられたのである。パーティーの当初の目的は、ビンゴを通して多世代が交流することであったが、何名かの年配の方も参加してくれたこと、子どもたちが楽しむ姿を集会所の外からお母さんたちや年配の方たちが見守ってくれたことなどで、形は少々変わってしまったが何とかそれを達成したようにも感じられた。

写真13 ハロウィンパレードの様子



写真14 スポットでの様子



写真 15 ハロウィンパーティーの様子



告しておきたい。それは理事会役員が中心になって、防災訓練の後に「防災カフェ」を実施したこと、さらには「朗読カフェ」や「昔遊びをするイベント」などがこの数カ月で定期的に持たれていることである。2年間を通じたこの事業全体の考察、そして地域関係の活性化のために何が必要なのかという大きな課題については、次年度にぜひ報告したいと考えている。

8. 地域関係の活性化を目指すために—今後の課題

2年目の活動は現在も継続中である。2014年3月には前年と同じように発表会とコミュニティカフェを開催することになっている。学生たちはこれまでの活動を通して得たことをどのように発表するか、とくに地域関係の活性化を目指した多世代交流型イベントのあり方を再度見つめ直す作業を行っている。2年目のゼミにおいては、イベントが一過性に終わらないためにも、日常的な「地域の居場所」が必要ではないか、との考えから、「地域の居場所」づくりを行っている先進事例の見学も行った。東京都港区と慶應義塾大学が連携して実施している「芝の家」「三田の家」と、横浜市栄区公田町団地のNPO法人お互いさまネットが実施している「あおぞら市」やレストランなどの見学である。こうした活動を通して、地域関係が構築されるには何が必要なのかということについて議論する機会をたびたび持った。イベントの実施が地域関係にどのような影響を与えたのか、それが活性化につながったのかといったことをこれから振り返り、3月の発表会とコミュニティカフェの実施につなげる予定である。一方、地域では新しい活動が生まれていることを是非報